

(熊野谷採録 1995 年アルハンゲリスク州上トイマ地区)

詩の前半は後半の比喻になっている。抒情的なチャストゥーシカはこうした文学的な特徴をもつ一方で、1行あたりの音節数や韻律は不規則になりがちである。踊りの歌と違って静止した状態でゆっくり歌われるため、リズムの揺れを楽しむことができるのだろう。伴奏楽器はつかない場合もあるが、ここではバラライカの伴奏に乗せて歌われた例を楽譜と共にあげてみる。

ああ、どこなの？ 私の好きな人 / どの村々の向こうなの？ / ああ、あなたを一目見られれば / 明るいこの瞳で

(*Юности-Они*, К. Балалайка бесписьменной традиции довоенного времени С.78-79..楽譜も同じ。翻訳筆者)

原詩の各行の音節は10－8－9－7で、アクセントの配置を見ても、文学詩なら韻律的には破格と呼ばれるところである。だが実際には美しいメロディーに乗せて楽譜のように歌われており、何ら異和感は感じられない。こうした恋愛を歌う静かな歌を、テンポの速いリズムカルなチャストゥーシカと峻別して「ストラダーニエ」と呼ぶ地方も多い。

儀礼の中のチャストゥーシカ

ロシアの農村には年間を通して様々な行事や儀礼があり、そこで歌われる歌があった。これら儀礼歌の多くは19世紀末から20世紀にかけて急速に失われたが、その機能の一部は、実はチャストゥーシカに引き継がれていた。例えば、北部を中心にロシア各地で知られているのが、結婚を歌うこんな歌である。

お嬢さんたち、お嫁に行くな / みんなに頭を下げねばならぬ
年寄りにも子供にも / それに悪魔の姑にも

(熊野谷採録 2000年アルハンゲリスク州上トイマ地区)

このように結婚を辛いものとして歌うチャストゥーシカは刊行物にも数多く掲載されているが、なぜこれほど結婚のマイナス面を強調するのかは説明されていない。実は、これらは北ロシアを中心に行われていた「婚礼泣き歌」の伝統をひきついだものである。かつて婚礼では、花嫁は儀礼的に泣かなければならなかった。教会へ行く前に両親の足もとにひれ伏し、家族や自由な娘時代との別れを大仰に嘆く。そこで歌われたのが、花嫁かその代理の泣き女による半即興的な泣き歌である。周りにいる花嫁の友達も、悲しみをあおるような歌を歌って花嫁を泣かせた。1910年代から1930年代生まれの歌い手の話を総合すると、アルハンゲリスク州中央部の村ではほぼ20世紀半ばまでこの「泣き」の伝統が残っていた。ただし仰々しく難しい泣き歌はもはや歌われず、悲しいチャストゥーシカを次々に歌っては、花嫁を泣かせていたのである。

もう一つ、特定の「場」と結びついているのが「新兵送り」のチャストゥーシカである。帝政ロシア時代から今に至るまでロシアの男子は徴兵を体験してきた。農村では、新兵が出発する前に友人達が別れの宴を催し、新兵とアコーディオン弾きを中心に村の道を歌いながら練り歩いた。いよいよ出発となると、集合場所である駅までの道のりを皆で歌いながら送っていく。この時に歌われたのが、やはりチャストゥーシカであった。例として、徴兵検査をパスして髪を切られるシーンを歌う歌と、新兵の心情を吐露する歌をあげよう。実際の歌い手は新兵自身とは限らない。誰かが歌い出したものを集団で繰り返したり、続きを合唱したりするのである。

待合室の窓際に / 僕の彼女は立っていた / 僕の頭が剃られ始めて / 僕の彼女は泣き出した

(熊野谷採録 1996年アルハンゲリスク州上トイマ地区)

今日は泣きたくなかったが / 涙が勝手にほとばしる / 軍隊に行きたくなかったが / 男はみんなそうしてる

(熊野谷採録 1996年アルハンゲリスク州上トイマ地区)

こそこそ話のチャストゥーシカ

チャストゥーシカの中には、踊りとも伴奏とも関係なく、むしろこっそり耳打ちされる歌もあった。それは当局に知られると身の危険となる政治や社会を風刺した歌、そしてロシア語の「豊かな」卑猥語を用いた笑いの歌である。庶民の歌であるチャストゥーシカは、天下国家よりもごく身近な事柄を笑い、その中には現代ではロシア人にも理解しにくいソ連時代の様々な制度も見られる。その一つが、コルホーズの班長が班員のその日の労働を点数化し、毎月の給料（しばしば現物支給）が「労働日」の数で決まるという「労働日制度」だろう。筆者が2000年に北ロシアの農村で聞いた歌にはこんなものがあった。風刺と艶笑を併せ持つ歌の例として紹介したい。

私、今日は稼いだわ / 4労働日もよ / 班長さんにはお約束 / 議長さんにはあげちゃった

(熊野谷採録 2000年アルハンゲリスク州上トイマ地区)

1日で4労働日という普通はあり得ない数字を、普通ではない働きによって獲得した…という歌なのである。

女の子だとこんな風に婉曲に表現することを、男たちは卑猥語を用いて歌いあい、あるいは大っぴらに、あるいはささやきあって笑ってきた。だがこうした「特殊な語彙」は日本語に訳すのが難しくもあり、本来「こそこそ」話すべきものであるから、公表は差し控えたいと思う。

